

# たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.19 平成2年6月30日



調査の進む相原・小山地区

十周年を節目に

所長 小畑 憲司

昭和五十五年七月に財団法人として設立された私共のセンターは、お陰様で十周年を迎えました。これまでセンターの事業運営に、ご理解とご支援を戴きました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

さて、センターは発足以来三千ヘクタール余の多摩ニュータウン区域内の膨大な遺跡群と取組んで参りましたが、発掘調査は順調に進み、現時点で七〇八割の進捗状況にあり、あと数年で終了できる見通しです。

こうした状況を踏まえ、センターとしては、今後の事業展開のあり方について検討しなければならぬと考えております。埋蔵文化財の調査研究の成果を、積極的に都民の皆様へ還元していくとともに、十周年を節目に、センターの役割と責務を再認識し、職員と共に一丸となって事業を推進していく所存でございます。今後とも、ご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

遺跡だより⑬

—多摩ニュータウンNo.245遺跡—



今回は、町田市小山町に所在するNo.245遺跡について紹介します。

No.245遺跡は、全国でもめずらしい環状積石遺構が発見され、東京都の史跡になっている田端遺跡の北側の斜面に位置しています。また、近くには、古代の木器が大量に発見されたNo.339遺跡もあります。

調査は現在進行中ですが、今までに、縄文時代中期から後期のはじめ（約5000年から3500年前）にかけての住居跡が約50軒程発見されており、当時、この地にむらがり、作られていたことがわかりました。また、住居跡は急

な斜面からも見つかったっており、我々をはじめ、多くの調査研究員を驚かせています。

縄文時代の住居は、竪穴住居（たてあなじゅうきょ）といって、地面を掘りくぼめて建てた半地下式の家です。現在までに、屋根や屋根を支えた柱は腐ってなくなってしまうので、実際に発掘調査で見つかるのは、床や柱を立てた穴や炉（いろり）の跡です。

他に、住居と同じ時期に作られた土坑が30基ほどまとまって見つかっています。中には、土器や耳飾りが入っていたものもありました。土器は副葬品として、また、耳飾りは死者が耳に付けていたものと思われ、この土壙群が墓であった可能性があります。

また、遺跡からは大量の土器や石器が見つかっています。土器には、煮沸きに使った深鉢形や、盛付けに使ったと思われる浅鉢形のものがあります。石器では、木を切ったり、土を掘るた

めに用いた石斧や、木の実をすりつぶすのに使ったと思われる磨石（すりいし）や石皿、矢の先に用いた石鏃（せきぞく）などがあります。他に、日常生活の道具ではありませんが、祭りや儀式に使ったと思われる石棒やミニチュア土器なども見つかっています。

調査は、9月末日までの予定ですが、現在も住居跡や土器石器が続々と見つかっています。これから調査が進むにつれて、縄文時代のむらの様子がより明らかになることでしょう。今後の調査結果が楽しみです。乞御期待次号！

（山本 孝司）



チンギス・ハーン陵墓を探る 1

チンギス・ハーンは、13世紀にアジアから東ヨーロッパにかけて広大な領土を擁したモンゴル帝国の建設者です。

彼は部族間の抗争に明け暮れていたモンゴル民族を統一し、帝国の礎を築いたところから、単なる英雄としてではなく、民族の象徴として、今もナンバー1の人気を持ち続けています。

世界で二番目に社会主義国として誕生したモンゴル人民共和国は、ソ連同様ベレストロイカで揺れながらも、モンゴル独自の道を模索しています。このようななかで、最近では批判の矢面に立たされる政治家を尻目に、永年タブー視されていたチンギス・ハーンの人気が増々高まるばかりです。

しかし、そのチンギス・ハーンはおろか、それに続く皇帝の陵墓はどこにあるのか、全くわかっていません。その陵墓の探索のため

に今年からモンゴル科学アカデミーと読売新聞社との共催によって、ゴルバン・ゴル・プロジェクトが三年計画で開始されました。ゴルバン・ゴルとは「三つの河」という意味で、モンゴル人民共和国ヘンタイー県を源流とするオノン、ヘルレン、トーラの三つの河をさす言葉です。

チンギス・ハーン陵墓の探索の意義は、もちろん世界的な意味も大きいのですが、モンゴルの人たちにとっても国民の象徴である一人間の生きた時代が明らかになることは、大きな興味であることはまちがいないことのようにです。

筆者は、幸いにもこのプロジェクトに参加する機会を得ることができました。今年度調査の前半期に加わり陵墓に関する直接的な手がかりを得るまでには至ってはいませんが、次回からは調査に関するお話を皆様のお手許に届けることにします。

（千野裕道）

文化財講座 <15>

縄文時代と人々 (3)

「平均寿命と八口」  
人生50年。といったのはもはや遠い昔のお話。今や日本人の平均寿命も70才を越え、世界一の長寿国。

では、今から4〜5千年前の縄文時代はどうだったのでしょうか。発掘された

縄文人の人骨  
およそ20体から年齢を読みとり、その平均

平均寿命を計算したところ、なんとたったの20才に達する

か達しないか。今日の状況からはとても信じられない数字です。

ただし、平均寿命が短かったのは何も縄文人に限ったことではなさそう、江戸時代でさえもせいぜい30才前後であったといわれています。もちろんどの時代でも50・60才まで生きた人もいますが、生ま

れてすぐに亡くなる子（乳児死亡率）や、出産時の母親の死亡率がきわめて高かったために、平均寿命としては前記のような低い数字になってしまっています。

縄文人は、特にこの出産と死に対する不安から身を守るために、「土偶」と呼ばれる土の人形をつくって生命の安全を祈りつづけていました。

平均寿命が急速にのびたのは戦後のお話。現代人は土偶のお守りのかわりに医学の発展をもって、今日の長寿国を形成しました。

次に、平均寿命20才の縄文人の人口はどの位だったのでしょうか。この点については、かつて何人かの研究者によって興味深い試算がおこなわれており、10万人とも25万人ともいわれています（ちなみに奈良時代の人口は560万人という数字があります）。

縄文人の人口を考える時の手がかりとして、一つの集落にどの位の人が生活し

ていたかが参考になります。現在、発掘調査によって判明してきた多摩ニュータウン内の遺跡では、縄文時代の集落を形成する一時期の住居の数は、1軒からせいぜい3・4軒が限度といった少数精鋭。

食料を自然の採集と狩猟に依存していた時代にあつては、食料の得られる量も限られており、またその技術も低かったため、人口密度も低く、集団のサイズもおのずと小さくなっていくはず。もしも取れる食料以上に人口が増えたならば、そこに住む人々はみな生きていけなくなることを知っていたのです。

そこで、縄文時代のある時期のニュータウン内の人口を試算してみると、1軒に5人住んでいた住居が、4軒集まって一つの集落をつくり、それが点々と6ヶ所程に分かれて住んでいたとして、5A×軒×6=120人。そして現在の人口は12万人。

（小葉一夫）

入館記念スタンプの設置

当館の展示ホール等には入館記念のスタンプがありませんでしたので、昨年12月〜1月末日までに当センター職員を対象にデザイン募集を行いました。

その結果、応募作品15点の中から3点が入選作品に選ばれました。

○調査研究部 長佐古真也

各家庭の暮らしぶりは、「その家とゴミバコをのぞくとよくわかる」と言われています。考古学の世界では、これらの家の痕跡やすてられた物から当時の生活を知る重要な情報を得ることができます。



○総務課

小川暢夫

来館者の大多数を占める小学生の方々に「縄文のむ

ら」の思い出をより深く記憶に焼き付けてもらうため、親しみやすいデザインにしてみました。



○総務課

春名智美

遺跡庭園（縄文のむら）や展示ホールの見学には、小学生などの子供達が多数いらつしやいます。

そこで、子供達が当館や復元住居を見学する様子かわいらしくデザインしてみました。



## 平成二年度の安全衛生推進方針について

わが国の労働災害発生件数は、昭和30年代に最多を記録したあと、大幅に減少してきました。しかし、最近はその減り方が鈍くなり、不休災害を含めた労働災害の総数は、今なお年間77万件にも達しています。

一方、東京都埋蔵文化財

センターにおける労働災害発生件数の推移をみると、次のとおりとなっています。

昭和60年	26 (14)
昭和61年	15 (5)
昭和62年	10 (3)
昭和63年	14 (8)
平成元年	12 (3)

〔( )内は内数で、休業件数〕

平成元年は、前年に比べ労働災害総数で2件(一四%)、休業災害では5件(六三%)減少しました。

平成二年度においてもこの傾向を更に進めて、限りなくゼロに近づけるべく、次のような内容の「方針」

を作成し、これに基づいて安全衛生対策を推進していくこととしました。

1 スローガン  
ゼロ災害をめざし  
さらにすすめよう  
安全と健康

2 基本方針

労働安全衛生対策を一層充実させ、安全で働きやすい作業環境の確立に努める。

3 年間目標

重大災害ゼロ、休業・不休災害半減、通勤災害ゼロ、交通事故ゼロ、健康の保持増進

4 重大災害防止の重点施策

①土砂崩壊災害の防止  
②建設機械災害の防止  
5 多発災害防止の重点施策

①腰痛などの防止  
②転倒災害の防止  
③激突され災害の防止  
6 安全衛生推進重点目標

①安全衛生管理体制の確立  
②快適な作業環境づくり

の推進

③安全作業の推進

④「年間安全衛生推進ス

ケジュール」による行事等の実施

⑤健康の保持増進のため

の措置(トータル・ヘルス・プロモーション・プラン||THP)

⑥交通安全の推進

⑦防火管理の徹底

7 期間重点テーマによる安全衛生対策

①4S(整理・整頓・清潔・清掃)の励行(年間)

②機械・器具等の点検整備の実施(4月~6月)

③災害多発期の注意の喚起(6月~8月)

④日射(熱射)病の予防

(7月~9月)

⑤暖房などによる火災の

予防(11月~4月)

⑥雨・霜・雪などによる転倒の防止(12月~3月)

### トピックス

▼5月12・13日の両日にわ

たり、東京大学を会場とし

て「日本考古学協会第56回

総会」と「公開講演会並び

に研究発表会」が開催され、

当センターからも多数の調

査研究員の参加があった。

▼平成二年度の文部省科学

研究費(奨励研究(B))の交

付は、館野 孝に内定した。

▼調査研究部の鶴間正明調

査研究員は、5月27日にめ

でたく結婚されました。

▼「縄文のむら」において

生活復原考証の準備が進ん

でいる。「火たき」は、年間

170日土・日曜日が中心。

▼本年度第一回目の遺跡見

学会は相原・小山地区で行

なわれた。風が強かったに

もかわらず、約700名の参

加があり、盛会裡に終了。

▼3月31日付けで、調査研

究部加藤修調査研究資料担

当主査は退職され、女子美

術大学へ転出しました。

また、同部伊藤敏行調査

▼4月1日付けで、所長土

屋道生が東京芸術劇場準備

室長として転出し、その後

任に労働経済局から小畑憲

司が就任しました。

▼4月1日付けで、東京都

教育庁文化課より西脇俊郎

係長が就任しました。

▼6月1日付けで西澤明調

査研究員が採用されました。

### あとがき

本号より編集は、土屋、上條にかわり、小畑、館野にバトンタッチ。前任者ごろうさまでした。

さて、今年度の広報・普及活動は、6月の遺跡見学会を皮切りに、8月の常設展解説、9月の文化財講座、10・11月の映画と講演会、

土器づくり教室等々盛沢山用意しています。前もって広報します。御参加下さい。



発行

財団法人 東京都教育文化財団  
東京都埋蔵文化財センター  
〒206 東京都多摩市落合  
1-14-2  
☎ 0423-73-5296  
0423-74-8044  
平成2年6月30日